特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会（第 34 回）

議事録

日　時　令和 5 年 5 月 16 日（火）13:30～15:30

場　所　西の丸会議室

出席者　構成員

丸山　　宏　　名城大学名誉教授　　座長
仲　　隆裕　　京都芸術大学教授　　副座長
高橋知奈津　　奈良文化財研究所研究員

オブザーバー

野村　勘治　　有限会社野村庭園研究所
平澤　　毅　　文化庁文化財第二課主任文化財調査官
山内　良祐　　愛知県県民文化局文化部文化芸術課文化財室

事務局

観光文化交流局名古屋城総合事務所
教育委員会生涯学習部文化財保護室

議　題　・北園池護岸修復等北側石組について
・令和 5 年度の二之丸庭園の発掘調査について

配布資料　特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議 庭園部会（第 34 回）資料

事務局	1　開会 2　あいさつ 本日は、ご多用の中、第 34 回特別史跡名古屋城跡全体整備検討会議庭園部会にご出席いただき、ありがとうございます。本日の部会は議題が 2 題あります。1 題目の北園池護岸修復等北側石組については、部会等でのご意見をもとに野村先生に再度検討いただいたので、その内容をご説明します。2 題目の令和 5 年度の二之丸庭園の発掘調査については、昨年度の調査のご報告とともに、今年度の調査についてご相談させていただきます。限られた時間ではありますが、忌憚のないご意見、ご指導をいただきたいと思います。何卒、よろしくお願いいたします。 3　構成員、事務局、オブザーバーの紹介 4　今回の議事内容 資料の確認をします。会議次第、出席者名簿が各 1 枚です。資料 1 の北園池護岸修復等北側石組については、A3 が 5 枚です。資料 2 の令和 5 年度の二之丸庭園の発掘調査については、A3 が 9 枚です。その他参考資料を配布しています。 では、ここから議事に移ります。進行は、丸山座長にお願いします。よろしくお願いいたします。
	5　議事 ・北園池護岸修復等北側石組について
丸山座長	それでは議事に移り、構成員の方に意見をお聞きしていきたいと思います。議事の一番目で、北園池の護岸修復等北側石組について、事務局よりご説明をお願いします。
事務局	本件については、前回 2 月の部会でいただいたご意見等をふまえ、検証内容を精査しています。その検証内容を前提に、野村先生に改めて整備イメージを作成いただき、ご相談させていただくものです。それでは、説明に移ります。 1. 経緯等です。図 2 の案 1、2 のルートと案 3 のルートを推定しており、案 1 は、石 A や石 B の北側を通る案。案 2 は、同じルートですが遺構面が低い、園路勾配が穏やかである案です。案 3 は、石 A、石 B の南側を通る案として設定し、追加の発掘調査をしました。 2. 発掘調査の結果についてご報告します。資料 1 には抜粋を載せているので、資料 2 でご説明させていただきます。資料 2 の 1 ページをご覧ください。調査は、園路遺構や近世の遺構、景石の据付状況を確認し、整備に際しての園路のルートや形状を確認することを目的に行いました。調査区については、図 1 に示したとおりです。

	まず、調査区５－１についてです。層の１から層の８は、現代の造成による堆積土であることがわかりました。写真１をご覧ください。層の８内から現代のものとみられる植木鉢の関係が出土しています。これによって、ここまでは現代のものではないかと判断しました。景石Ａと景石Ｄの下端は確認できませんでしたが、層の 16 が権現山ないし北園池の造成に伴う近世盛土と判断し、これより下に続いているので、石Ａと石Ｄは原位置を保っていると判断しました。層の９から 15 は、近代以降の遺物は出土していません。層としては黒っぽい粘質の土で、明確な土の差は生じていないので、客土の単位の違いであると考え、石Ａ、石Ｄの据え付け後の充填土ではないかと現時点では想定しています。ただし、いずれの層からも園路遺構は確認できていません。層の９と 13 に土層の切り合いが見られ、層の９から 12 が石Ａの背面になっており、層の 13 から 15 が石Ｄの背面に伴うものと判断しています。順番としては、石Ｄを置いた後に石Ａを置いたのではないかと考えています。ただし、明確な、大きな時期差があるとは考えていません。ほぼ同時期に据えたものと考えています。 続いて石Ｂについてです。資料２の２ページ、写真５をご覧ください。石Ｂの背面については、表土がかく乱層になっており、近代以降の改変により、近世の土層は残存していません。表土と攪乱層については、明治期の兵舎造成にともなう改変と思われることから、石Ｂは近世に据えられた石ではない可能性があると考えています。 続いて調査区５－２です。石Ｃに関する調査を行いました。写真８をご覧ください。層の黄色っぽい土が、昭和の造成にともなう土であると考えられます。層の 11 から 14 では、角礫や円礫が入っていましたが、明確な園路遺構は確認できませんでした。層の 15 については、黄褐色の粘質土が一定の範囲で広がっていました。写真では見にくいですが、写真８の角のところが層の 15 です。これが権現山の盛土の一部等近世の基盤層と判断したため、これ以上の掘削は行いませんでした。石Ｃの直下には、煉瓦片をともなう土が流入しており、タタキ面にこの層を挟んで乗っていることを確認しました。そのため、意図的にタタキの上に景石を据えたというよりも、石Ｃについては、近代以降に据えられたか、もしくは近代以降の造成の影響で原位置から動いた結果、現在のタタキの上に乗った可能性が高いと考えています。 続きまして、発掘成果からみた園路の検証についてです。資料１の２ページをご覧ください。池の東部に関しては、過年度の発掘調査による成果と絵図による検証を行っています。それらに追加して、今回の調査成果から検証を行いました。調査前に推定した案１と２については、高さ 1m以上の石Ｄを飛び越えて園路を設定することは可能性としては低いと考えています。石Ｂについては、近世に据えられた石ではない可能性が高いので、推定園路としては図５の案３’のように石Ｂの現在の位置を通り、石Ｃの南側へ続いていくルートが最もふさわしいかと考えています。しかし、石Ｂについては明治期の兵舎造成にともなう修景の姿をとどめている可能性があるので、二之丸庭園整備計画で整理しているとおり、明治期の遺構も尊重すべきものとして、石Ｂを現在位置にとどめるべきかと思います。石Ｂを南側に迂回するルートとして、案３、赤破線で示したルートが適当ではないかと検証しました。 ３ページの４. 整備案をご覧ください。園路の検証や、現在ある石はそのままの位置とすることを踏まえ、園路を案３のルート、図８の赤破線

	にすることを前提に整備案を検討しました。整備イメージ図については野村先生に改めて作成していただいており、図６が立面図、図７が平面図です。立面図の下に使用石材の大きさを記載しています。そして、写真２が現況写真で、現在ある石をF、D、A、B、Cと表示しています。図８については、野村先生に描いていただいた平面イメージをトレースしてオルソ画像に重ねています。図８の中の黒い点線で示したものは、今回の検証の対象ではない園路を表示しています。４ページの整備イメージと絵図との比較をご覧いただきますと、鳥居のあたりの園路の形状や、遺構で発見された半島状のところのルートとして、図８にこの園路形状を示しています。先生方のお手元には、野村先生に作成していただいた資料の原寸大と、使用する石材を想定した写真を参考資料として置いていますので、あわせてご覧ください。それでは野村先生に整備イメージについてご解説等をお願いします。
野村オブザーバー	前回は案１のルートを前提に、今回は案３のルートを前提にして２つの案で整備イメージ図を描かせていただきました。既存の石Ｄについては、案１のルートを前提とした場合、それを乗り越えて園路として通っていかなければならないということが、前回のプランでありました。ただ、発掘調査の結果から、石Ｄは近世層にあって原位置から動いていないということもありましたし、動いている可能性の高い石Ｂは現在の位置としたまま南へ迂回することが適当という案がでました。それに従って図を描くとどうなるのだろうかと。本来は案３’の青破線のルートであるが、石Ｂは動かせないということで迂回して、案３の赤破線のルートを辿る園路としています。半島状の遺構にある園路ルートは、黒い点線で表現されている部分であり、ある程度絵図に似通ったような線形が作れます。そのＵ字型の園路ルートの右側のほうに、植栽等が描かれている部分がありますが、案３のルートを前提とした場合スペースが不足して整備することが不可能となります。ですが、その部分だけを度外視すれば、ほぼ現在の状況に擦り合わせができる、というのが今回のプランです。最終的にどちらにするかということをお考えいただきたいと思っています。 基本的に、今回のプランは尾二ノ丸御庭之図等の絵図に従うかたちで、また、現在ある名古屋城の石等をスケッチしてコラージュするようなかたちでつくりあげることで、既存の庭の遺構とつなぐことができるのではないかと思いました。既存の庭の部分につないでいくにはしっかりとこだわって、石の大きさや石質についてはかなり慎重にやらなければならないと考えています。それは、近いかたちでできるのではないかと思っていますが、問題はルートの線形であり、それがそのまま石組に関連してきますので、このあたりのご判断を仰ぎたいと思っています。
事務局	ありがとうございます。それでは最後に５ページをご覧ください。施工図です。上に平面図、その下に立面図、右下に断面図を表示しています。こちらは野村先生の整備イメージ図を基に作成しました。基本的には、現況に景石を据え付けていきますが、土を削る場合もあります。その場合には、近世包含層でないと確認できる範囲、既屈部分とし、砕石や土の補充等を行い、深さや向き、角度等を調整して据え付けていきたいと考えています。また、必要に応じて土壌流出防止のために芝張を行いたいと考えています。説明は以上です。

丸山座長	野村さん、ありがとうございました。それでは、議事に移りたいと思います。4ページの赤破線の案3は妥協案と言いますでしょうか。本来は青破線ですが、石Bがあり、それは近世のものではないかもしれないけども動かすのにも基づくものがないということで、少し迂回する案を考えさせてもらいました。いかがでしょうか。 野村さん、5ページの雪見灯籠は以前示されたままの小さいものが描かれていますが、もう少し大きくしないといけないかという気がしています。いかがですか。
野村オブザーバー	ここに載っているサイズがそのままで良いとは考えていません。私の描いた整備イメージ図とは若干異なっています。整備イメージ図から灯籠自体がどれくらいのサイズになるかということを検討しましたところ、笠は六角形でだいたいの大きさではありますが、直径で最大1.5m、概ね1.2mから1.5mくらいのものであろうと推定しています。前回のプランでは1.2mくらいで描いたのではないかと思いますが、少し大きめにして1.5mくらいのものにすると、ほぼこの印象のものになっていくのではないかという気がしています。灯籠の脚は多分3本脚くらいだろうと思いますが、実際に石を組んでいくときにまたいで後ろの石にも置けるようなかたちで考えれば、脚はもう少し縮めることもできると思います。模型を作って、それで最終的には検討したほうがよいのではないかと思いますし、実際に見て皆さんがこれで納得というのが理想かと思います。
丸山座長	ありがとうございました。灯籠に関しては制作等に携わる詳しい方にアドバイスをもらって検討することが必要だと思います。心配しているのは、こういう図面が残ってしまうと、これで進んでしまう可能性があるので、注意してもらいたいです。
事務局	しっかり記録に残します。
丸山座長	絵があるとそれが先行してしまいがちですので。 そして、同じく5ページの図ですが、ここではあえて描かれていないのだと思いますが、石組みで飼石は必要ですよね。
事務局	必要だと考えています。
丸山座長	5ページにはかませ石とあり、材料表に個数は書いていないけれど、わかるように描いておいてほしいです。他はいかがですか。
野村オブザーバー	石組については、今回のプランでいくと、前回のプランよりもかなり前、南の方に出てきますので、法の傾斜は緩やかになると考えます。ですので、施工上ではよくなったと考えています。
丸山座長	施工が少ししやすくなったと。間ははがね土等を使うと安定しやすくなると思います。
仲副座長	何回も議論をして無理のない案になったかと思います。石Bを残すか

	残さないかというのも議論になりましたし、今回、発掘調査の結果等もきちんと整理して示していただいて、北園池の東側や築山を削って破壊した中でも、ある程度形をまとめて造ろうとした明治の、近代の営みの痕跡というのが、ほぼ明らかになりました。それらを残しながら、江戸時代の姿と調和させる、ということでよいのではないかと思います。 野村先生にお伺いします。雪見灯籠はイメージとしてお示ししていただいているのですけれども、その火袋のバランスについて絵図を見ると縦長に見えますが、こちらは横長のイメージでしょうか。
野村オブザーバー	絵図の他、現存の各所の灯籠を検討してかたちにしましたが、あくまで参考とお考えくだされば幸いです。詳細はこれからだと考えます。
仲副座長	わかりました。現存の灯籠でこれに近いとイメージされているところはありますか。
野村オブザーバー	以前に私自身が関わって雪見灯籠を作っておりますが、その際一番参考にし、実測にも行ったのが兼六園です。
野村オブザーバー	兼六園は江戸中期前後あたりの頃に築庭されていますし、ここにある灯籠に近いと考えています。バランス等も含めて再度検討させていただければと思っています。
仲副座長	ありがとうございます。 植栽については、石組が済んでから考えるのでしょうか。
丸山座長	植栽は、絵図のとおりにできないところがあると思います。例えば笹巻山では絵図にサクラがありますが、実際に植えるにはスペースがなくて難しい。ここも全体の中で考えなければいけないですが、石組が済んで、植えられるところがあれば実施するということでしょうか。
仲副座長	こちらは、観覧者が入るようにしますか。
丸山座長	通常は入れませんが、特別公開はあるかと思います。野村さんも言われましたが、半島状の遺構のところは絵図では広いのですが、実態は狭く、常時入れるようにするのは難しいでしょう。
仲副座長	絵図について、丸山先生のお見立てでは、御城御庭絵図がある程度設計図のようなもので、竣工後に描いたのが尾二ノ丸御庭之図とお考えですか。
丸山座長	尾二ノ丸御庭之図も竣工前だと思います。なぜかというと、北園池の東に架かる木橋について、尾二ノ丸御庭之図には基礎が６つ描かれていますが、実態としては４つしかないので、途中のものだと思います
仲副座長	だんだん精度が高まっていくのかもしれないですね。例えばＵ字型の園路ルートのところでは、御城御庭絵図には結構石組がありますが、尾二ノ丸御庭之図には少ないように思います。

丸山座長	尾二ノ丸御庭之図のほうが少し遅い時期かもしれませんが、木橋のような実態と異なるところもあり、これは殿様に説明するために描いたようにも感じます。
仲副座長	基本的にはこの2つの絵図と発掘調査の成果、現況を見据えながら、この委員会で議論して蓋然性の高いものを示していくということですね。
丸山座長	そのとおりです。ただ、削平されて遺構が失われた場所では絵図等の史料で判断することになると思います。
平澤オブザーバー	以前の絵図の検証で、その精度については、地物の総体的な位置関係については踏襲しているけども、縮尺や実測したそれぞれの距離は不正確であることがわかっています。ですから、絵図をもとに全体のバランスを考えて、最終的には現場で組むしかないと思います。 もう一つは、遺構からの観点で、立体的な位置関係がどうしても変わらざるを得ない部分があるので、その状況に応じて判断することになりますが、絵図に含まれている情報を実際の庭園にどのように写し取るかというところは、個別のケースを積み重ねて記録し、研究の成果が最終的に示せるようにされたほうがよいと思います。
高橋構成員	園路ルートが案1、2である可能性が低いと判断した根拠については、石Dの西側で大きな段差がでるということでした。それは具体的に、標高差がどれくらいになりますか。2ページには高さ1m以上の石と書いてありますが、近世の想定される地盤から石を超えるのに高低差がどのくらいあるのでしょうか。
事務局	1mくらいと考えています。
高橋構成員	西側の地盤標高が出ているということでよいのでしょうか。
事務局	西側については、過年度に発掘調査をしていますが、そのときに近世までは掘削ができませんでしたので、正確な近世の地盤高は分からないです。
高橋構成員	ただ、もっとそれより下ということは明らかということですね。何cm以上のギャップが発生するというのが、数字として出せるのかと思いました。そのようなことを、案1、2ではないという説明を少し具体的に記載すると説得力があるかと感じます。
丸山座長	2ページの（2）の園路の検証で、高さ1m以上の石Dを飛び越えて園路を設定することは可能性として低いということで、現況からは案3にせざるを得ないというところだと思います。
高橋構成員	乗り越えられる位置を超えた高さ、ギャップが、現状の調査から示せればよいかと思いました。

丸山座長	では、石Ｂは取り除けないので、案３で進めていくということでよいでしょうか。
平澤オブザーバー	基本的な方針は今の議論でよいと思いますが、石Ｂの東側のおさめについて、３ページの図７では、石Ｂが園路に突出して全体から浮いている状態になっていますし、資料２の２ページ写真５を見ても、石Ｂの東側を、築山の裾野を上手く据え付けていかないとおさまらないと思います。それは、また検討していただければと思います。
野村オブザーバー	実は、石Ｂについて、３ページの図７を描くときに、前のプランと違うことがわかればと、本来石Ｂはなかったものだと、わざと強調しています。最初は、厚みのある石９の南面側に揃えるように石Ｂを描いていましたが、かなり窮屈になってしまいますので、あえて強調して突出して描いたというのがあります。
平澤オブザーバー	最終的な仕上がりとして石Ｂのおさまりが気になりました。
野村オブザーバー	据え付けるときに、もう少し石９を南側へ出していくとおさまりがついてくると思います。既存の庭園遺構との繋ぎの部分ですので、皆さんに見ていただき、ご意見をいただきながら決めたいと思っています。
平澤オブザーバー	絵図については、部分で見方の向きが異なるため、それを平面的にも立体的にも、そして総体的なバランスを見ながらどのように整備するかを検討し、その記録を積み重ねて確認できるようにしておいたほうがよいと思います。
野村オブザーバー	２つの絵図を見ていると、全体として権現山のほうに向かってせり上がっていくように、石の流れができるように組んであります。実は、図６及び図７の石 11 だけ逆になっていまして、それは想定する石材の表情があまり良くなかったのであえてそのようにしてしまったのですが、別の石に替える等の検討をして直前まで相応しい石を探す努力をしたいと思います。
平澤オブザーバー	10 年くらい前に権現山の裾野の石をどうするかという時にもありましたが、施工の際、全体の要になる石をきちんと議論していただいたうえでそれを据えて、それから要になる石の間をつないでいくことで取り組んでいただければと思います。
野村オブザーバー	今回の整備イメージ図でも大きな石をどのように配置するかということから始めていますので、それと同じ作業を現場でもやるということかと思っています。
平澤オブザーバー	よろしくお願いします。
丸山座長	イメージはあっても実際の石を持ってきたら変わることもあると思います。市の工事発注で石の大きさや数量等が必要になることから、野村さんが丁寧に対応されたのだと思っています。

野村オブザーバー	本当に少し石を傾けるだけで表情は全く変わってきます。ぜひ現場でご覧いただければと思います。
平澤オブザーバー	要の石を据える順番等の戦略について、大枠をご議論されたうえで、どの範囲を一つの区切りとしてやるかということはあるかと思います。
野村オブザーバー	ポイントとなる要の石についてある程度のめどをつけたところで皆さんに見てもらうとよいのではないかと思います。
仲副座長	石Ｂと石９の関係で、近代に動かしたということが発掘調査結果から明らかになったので、その根拠になった背面の土は残しておいたほうがよいと思うのですが、この設計だとどのくらい削ることになるのですか。
野村オブザーバー	今回のプランは前回のプランよりも全体的に南側に据えますので緩やかになり、それほど削ることにならないと思います。前回のプランのほうが削らなければいけないと思います。
丸山座長	できるだけ保存するため、近代の土を残しながら上に据えるとか。
平澤オブザーバー	保存しながら、絵図に描かれているバランス感や思想みたいなものを写し取り、全体として上手くおさめるということでしょうか。
野村オブザーバー	今の状態ですと切土よりもむしろ盛土が増えていくのではないかと思っています。
丸山座長	設計するうえで近世の層までは達しないとするところは必要だと思います。 また、以前から気になっているのですが、野村さんが描いてくださった２ページの点線で囲ってある石橋、これはどうするのかというのが一番気になっています。石橋の架かる石組は修復したのに石橋自体は貧相です。例えば三の丸庭園にある石橋のレプリカをグラスファイバーでつくるだとか。
平澤オブザーバー	遺跡の整備ではないので石材でつくっていただいたほうがいいと思います。
丸山座長	しかし、とても大きくて石材でできるだろうかという気もしていて。グラスファイバーならば軽いと思いまして。
高橋構成員	年数が経ったときに怖いかもしれませんね。
平澤オブザーバー	余芳の手水のときにもお話しましたけれども、基本的には、組み上げる技術や素材は踏襲しつつということかと思います。写してもしようがないものですから、技術により素材を組み上げたものであることが、おそらく名勝庭園では大事なのだと思います。

丸山座長	それと、余芳の前や今回の石組の上等灯籠がたくさん描かれているので、どれだけを再現するのかということもあります。数だけでなく、大きさも考えなければいけません。灯籠は後でもできるので、まずは石組を急ぐということかと思います。
高橋構成員	資料１の４ページで、絵図と番号で石を合わせていますが、絵図は相対的な位置関係を示しているということを重視して示したほうがよいと思います。今は全てを示していて、右側から順番に並べているという感じになってしまっています。石Ｂも絵図にあるようになってしまっているので、要の石の整合がどうかというところに留めておいたほうがよいと思いました。 野村先生の作成された整備イメージ図等を見させていただいても、石Ｆや石Ａ等地形の転換になるようなところにある石を絵図と整合させていき、その間は調整できるところになっているかと思いますので、相対関係を示すうえではそのほうがよいかと思いました。
野村オブザーバー	同感です。ありがとうございます。
丸山座長	野村さんに描いていただいているのは、先ほどから話が出ている主要な石を、大きな石を据えることが基本で、その後間を石でつないでいくという考え方だと思います。絵図からこの石が重要だというのは見ていただいていると思いますので。
野村オブザーバー	今回のプランは、めどがつく石材の中でどれくらいの量、大きさのものが必要かの検討で番号をつけました。これで確定というわけではありません。 また、おっしゃっていただきましたとおり、大きな石が一番大事です。それを最低限どれかと決めて、あとは詰めていくというかたちでよいかと思います。
平澤オブザーバー	実際の庭の造りも、これだけの大きな絵図のつくり方もおそらく似ていて、端から描くことはしていないと思います。要となるものを配置して、その間を描いているはずです。その意味では、絵図の描き方を研究することが大事です。もしかしたら実際の庭の空間づくりとは同じではないかもしれませんが、考え方や姿勢については同じなのだと思います。絵図の中で要になっている地物がどれであるかの見極めがつくかどうかはわかりかねますが、端からは描かないと思います。
野村オブザーバー	絵図を見ていると、ポイントの石だけきちんと描いているように感じます。ポイントとなる石は異なる絵図でオーバーラップすることが結構あり、例えば石 14 もそれにあたると思われます。逆にいうと、絵図を描くときにすでにある部分は粗く表現されている、例えば、2 つの絵図を比較すると手水鉢が描いてない箇所等もあります。
野村オブザーバー	図 9 と図 10 ともに、左のほうにせり上がっていくかんじになっており、例えばサイズが大きな石 11 はオーバーラップしています。そういった要になるものから据えていく、そこがポイントだと思います。あと

	はつなぎとなります。今回も要となるものを挙げて造っていく必要があると思っています。この２つの絵図から要となるものを挙げてオーバーラップするものは、確実に実施したのだろうと思われます。
丸山座長	絵を見ていると、描き方が違いますよね。力の入っているところと、背景でながして描いているところとだいぶ違うように感じます。
野村オブザーバー	力がはいっているところは、よくわかります。
丸山座長	わかりますね。
野村オブザーバー	ビューポイントが南側の護岸のあたりにあって、その上に北側を見るように描かれています。南側の護岸の描かれ方は粗いので、実際に整備するときには北側に準ずるかたちでやるしかしようがないのかと思います。
丸山座長	大きな5～6ｔの石が複数入れば迫力はありますが、そういう石がなかなかありません。
野村オブザーバー	そこまでのなかなかよい石はないですね。
丸山座長	絵図で石14を見ていると、1つの石ではなく、いくつかの石を組み合わせているように見えます。それは、野村さんの腕の見せ所になると思います。
野村オブザーバー	予算つけて大きな石を買ってください。
丸山座長	やはり大きい石はほしいですよね。大名庭園ですからね。なるべく大きいのを買っていただきたいと思います。 それでは、ルートは提示された案3の石Ｂを迂回するルートとすることでよろしいでしょうか。
仲副座長	ルートについて平面的には概ねよいかと思いますが、平澤さんも言われた全体のバランスというのか、構成をどう読み取るのかというところが気になりました。さきほどのご説明で、権現山の裾野が手前にきて緩やかに据えつくというお話がありました。それで改めて絵図を見てみると、築山から裾野にかけていったん下がって、また少し上がって石組があるようにも見えますがいかがでしょうか。
野村オブザーバー	絵図では野筋のようなものが描かれています。今回のプランでは園路ルートが南側にあるので野筋のようなものができるのではないかと、盛土が必要になってくるのではないかと思います。
仲副座長	そういうことですね。
野村オブザーバー	そうすると表情が豊かなものになっていくのではないかと思います。

仲副座長	立面図はそのようなイメージで、平面図には等高線が入りますか。
野村オブザーバー	施工の段階では、そういう指示が必要かと思います。そうでないと土量の計算ができないと思います。
仲副座長	わかりました。
丸山座長	図面作成にあたり、主要なところで切断線をつくり、遺構が保存されていることを明示していただく、そのあたりは注意してもらいたいと思います。 そして、全体整備検討会議では、発掘調査成果と絵図からルートを推定したこと、また、石Bは歴史的経緯を示すものとして保護することを考えてルートを設定したということについて説明してもらいたいです。また、使用する石材については、めどをつけてもらっているので、それに準じたもので進めていくということかと思っています。 それでは、2つ目の令和5年度の二之丸庭園の発掘調査について、ご説明をお願いします。
	・令和5年度の二之丸庭園の発掘調査について
事務局	今年度の調査計画のご相談にあたり、昨年度実施した 10 次調査の成果についてご報告いたします。資料2の3ページ右側の調査区1～4北園池の調査につきましては、先生方に現場作業中に現地をご視察いただいておりますので、説明を割愛いたします。 6ページ調査区3についてご説明いたします。こちらは現時点でのまとめであり、遺構・遺物の個別の精査や、土層断面の整合性等を含めた精緻な作業は継続中です。 調査目的としては、東御庭の残存遺構を把握するために実施しており、現場作業中の時点で先生方から2つの調査課題をご指摘いただきました。まず、課題のひとつであった調査区3の北側で出土した門礎石周辺の改修痕跡を精査するために、さらに掘り進めました。また、調査区3の南側では、江戸時代の庭園遺構が遺っているかどうかを含め、もうひとつの課題である池の玉石面の範囲確認もあわせて行いました。 図9は調査区3北側のオルソ画像になります。黄色の破線で囲ったところに、江戸時代の庭園遺構の一部が非常に良好に残存しています。その中の緑色で、南北に引いた線が門礎石のラインとなります。また、東西に引いた緑色の線は、塀の礎石のラインです。南側の門礎石は、7ページの写真 21 のとおり、礎石が 2 重となった状態で出土しました。上に乗っている石は、花崗岩で、方形に形を整え、ほぞ穴を空けたものが据えられていました。下の礎石の状況を把握するため、上の礎石の位置の座標等を記録したのち、一時的に外したところ、写真 22 のように、下の礎石にもほぞ穴があいていることが判明しました。なお、撮影後には、上の礎石を原位置に戻しました。下の礎石は、自然な石を表面だけ加工してあることが北側の礎石と共通していること等を踏まえると、南側の礎石が2重となっていた理由として、門柱の一部が腐ってしまったので礎石を上げて、というような補修を行っていたのではないかと考えています。 そして、同じく検出した溝跡については、遺構であるため、なるべく

	最小限に断ち割るかたちで調査をしました。溝底の高さの検討から、図9の青色の矢印のかたちで集水桝に向かって水が集約され、東側へ流れていくと想定しています。集水桝は、7ページの写真23及び写真24です。こちらは、L字の範囲で可能な限り最小限に掘削を留めるかたちで断ち割りをしました。集水桝の南東部分の石組みが、少し沈下していることがわかりました。なお、検出した石組みは立面図を作成しています。また、遺物は、集水桝に投げ入れた状態で出土しました。これらの遺物は、出土位置を記録して、出土番号も振っています。少し見にくいですが、写真23に映る磁器の皿には「四中隊」と漢字で書いてあることから、陸軍期の遺物の可能性が高いと考えています。その時期にも、集水桝は共存ないし、併存していた可能性があります。6ページの図9の橙色の線で示した近現代コンクリート基礎が、おそらく兵器庫の跡と思われますので、この兵器庫が存在したときにこの集水桝は機能していたのか等、今後の検討課題のひとつと考えています。 　さらに、図9の大きな黄色の破線で囲ったエリアの左下に石列が見つかっています。間知石を2段重ねた石列が東西に帯状に続いています。過去の調査で西側でもこの石段が出土しており、それが今回の調査区に続いて出土していますが、東側の景石群1のところで石列が途切れています。これが、どういうことを示すのかというのは、まだはっきりわかっていません。そして、この石列を境に北側と南側の遺構の検出面に段差が生じていることが判明しました。標高値は石列より北が13m、石列より南側が13.2mと20ｃｍくらいの差で、南側のほうが少し高くなっています。と当時の地形が庭園内部に向かって段差になっていたのではないかと、考えられます。 　次に調査区3の南側をご説明させていただきます。8ページ図10をご覧ください。こちらは、近代以降の改変が著しく、ほぼ遺構が残っていません。その中で、近世の遺構と断定はできませんが、池跡や水琴窟跡を検出しました。 　池跡について、東側の一部は、玉石のサイズがこぶし大のサイズに変化していることがわかりました。さらにその東側には煉瓦の廃棄土坑が玉石面を寸断しており、玉石の東端がはっきりと確認できませんでした。ただし、廃棄された煉瓦を一時的に外し、池の断面の記録を取っていますので、この部分の精査もあわせて、池底の仕組みや、景石の据えたその下の様相等を今後整理させていただければと思います。 　水琴窟跡について、7ページ写真25をご覧ください。鉄管が近くまで埋設していたので、後世の改変により滅失していてもおかしくない状況でしたが、かろうじてここまで形が残っていた状態で検出することができました。残存直径でおよそ32ｃｍの甕が、伏せた状態で底に埋め込まれています。甕の上のタタキに赤い石が散りばめられていて、石の抜き取り痕がみられます。今後は、水琴窟の構造や池跡との比較等が課題となります。なお、出土遺構は、埋め戻しの際にブルーシート等で養生埋め戻しいたしました。 　続きまして、今年度の調査についてご説明させていただきます。9ページをご覧ください。図11に示した景石群は、調査区3の図9の景石群2に該当し、2、3石の景石が検出されています。また、同じく図9で先ほどご説明させていただいた景石群1でもまとまった景石が検出されていますが、これらの景石群の間の空間は、攪乱が多くて明確な庭園遺構を検出するに至りませんでした。整備の指標とする御城御庭絵図には

	築山のようなものが描かれていますが、近代の造成の際に滅失した可能性が高いと考えています。これらの景石群が連動しているのであれば、池跡が近世の遺構になんらかの関係があったのではないかと考えてもよいと思います。本件では、この部分の調査ができなかったため、景石群と池跡との関係性、前後関係、あるいは併存関係というのが、まだはっきりしておらず、今後の調査の課題となっています。本件で可能な範囲で掘り下げましたが、9ページの写真26のとおり、遺構面より上の造成土のかく乱がひどく、近世遺構面まで追えなかった実情があります。そこで、この池跡や水琴窟跡のある南側部分と近世の遺構が残っている北側部分の繋ぎの関係性を知るうえで　図 12 にあるような調査区を今年度は設定し、第 10 次発掘調査の成果をさらに明らかにすることを目的とした調査を行いたいと考えています。 　なお、今年度の調査区には2本の樹木があります。ジュウガツザクラとオオシマザクラです。ジュウガツザクラは、枯れた部分が多く、健全とはいいがたい状態です。発掘調査による掘削等の影響があると、その後に対処してもどうなるかということも含めて、非常にデリケートな状態と思っており、撤去せざるをえないと思っています。そちらも調査を進めるうえでの課題として、また現地でご議論いただければと思っています。
丸山座長	ありがとうございました。サクラの木は切ってもよいと思います。調査をするために必要ですし、ここは今後の整備で高さが変わる可能性がありますので。 　ところで、現場作業中に全体整備検討会議で視察をした際、図9の北側エリアのところで薬医門ではないだろうと麓先生がおっしゃったような記憶ですが、これについてはいかがでしょうか。
事務局	そうです。控えの礎石も精査しましたが、同じ面からはでてきていません。出土したこれらの礎石は門の礎石ということで結論づけていますが、遺構の残存状況から明確に薬医門であったという判断はできません。
丸山座長	御城御庭絵図には薬医門と書いてありますよね。
事務局	そのとおりです。
丸山座長	それが少し気になっています。図8には（薬医門）と書くとか。 　さきほども言いましたが、絵図では橋の礎石が6つあるけれど実態は4つである等絵図は実態と異なるところがある、簡略化しているようなところもあるような気がしています。 　ところで水琴窟について何かご意見はありませんか。
野村オブザーバー	特にはないですが、ただ水琴窟と言ってしまうのは無理があると思います。
野村オブザーバー	普通の水門というか、手水鉢があって、そこで排水をする施設ということかと思います。穴があいて水が落ちるところに甕がふせてあり、排

	水が悪くなると水が溜まって、ときに水琴窟のように反響して音がする。のちには、意図的にそういうふうにしたりしますが、水琴窟かどうかはわからないかと思います。
仲副座長	これは、すでに埋め戻しされていますか。
事務局	埋め戻しています。
仲副座長	どうして水琴窟と判断されたのですか。
事務局	甕がふせてあるということで判断しました。
仲副座長	どれが甕ですか。
事務局	写真 25 の中央下のところです。
丸山座長	穴があいているところです。
事務局	埋められた伏せた甕に穴が穿ってあり、内部が見える空洞状態でしたので判断しました。今の野村先生のお話ですと、これは水門の可能性が高いということでしょうか。
野村オブザーバー	用水路とは異なりますが、全体的に水を溜めるところがあって順番に排水していく、そういう施設として甕をふせたのですね。排水が悪いところに水が溜まって、そこに水が落ちるとぽちゃん、ぽちゃんと音がして、それがいいということになって、皆が作るようになったと。最初にそういうことを始めたのは小堀遠州という話もあります。今回のものは、それとはまた違うのではないかと思いますが、ただ、残照はそれだということになっています。
仲副座長	写真 25 からはよくわからなくて。甕に小さな穴と、その下に割れているのが見えているだけのような。
事務局	そうです。検出したときに割れた状態でした。写真 25 の右下に鉄管がありますが、この鉄管を埋設するときにおそらく破損したと思われます。
仲副座長	甕の中を覗くとどうなっていましたか。
事務局	中は、最初は埋土の砂が流入していましたが、おそらく当時は空洞であったと思います。
野村オブザーバー	実際に水が溜まって落として、いい音がしたら水琴窟とそのときはいっています。
丸山座長	水琴窟も、先ほど野村さんがいわれたように、排水施設ですよね。たまたま、それが、音が鳴って。今は常滑で水琴窟用の甕が作られていま

	すが、この甕は常滑ですか。
事務局	そう思いますが、常滑のものと具体的なところまでの判断にたどり着けていません。常滑の赤（朱泥い）ものであると、今の段階では判断しています。
野村オブザーバー	多分そうでしょうね。
仲副座長	甕は、埋めてあるわけですよね。どういう埋め方ですか。ぴったり土をつけて埋めて、上のほうは直接漆喰となりますか。隙間なくタタキを打っているのですか。
事務局	そうです。まだ精査が必要ではありますが、少し赤味がかった土を、基盤層と位置付けており、その層に穴を掘って、固い土で固めて、甕を埋めてからさらに固めているような印象です。
丸山座長	それだと水琴窟ではないと思います。水琴窟は、甕のまわりに空間がないといけないです。石を詰める、栗石を巻くのですが、これは水抜きとなります。
野村オブザーバー	土でも反響がいいのはあります。のちにきちんと作るようになった時には、そういうことをやっています。
丸山座長	先ほど、礎石が２重になっているというのは、沈下したから上に重ねたということでしょうか。どういう判断をされたのですか。
事務局	柱自体が残っていないので、なんとも言えないのですが、表二之門の門柱だと、腐食したために石で補っています。そういう補修事例があるので、腐食対策ということも考えられます。このあたりも流路の近くで、常に水が集まる場所ですから、丸山先生のおっしゃるとおり門の沈下の可能性があります。１つの要因だけでなく、複数の要因があったのではないかと思います。このように修復を加えながら門を維持していたことが、今回の調査で出土した痕跡からわかります。
丸山座長	築地塀の位置が推定できる調査結果がでたのは大きな成果だと思います。
山内オブザーバー	確認をさせてください。図９の北側の部分で暗渠と集水桝がありますが、そのさらに東のほうにあるのは、過去の調査等で明らかになった露出展示をしている部分であり、排水の流れとしては、今回の調査区の溝から集水桝に、そしてさらに東側の露出展示の暗渠へ流れていくということでよろしいでしょうか。
事務局	そうです。
山内オブザーバー	前に出席できなかったので確認をしました。

事務局	立面図でお示しできればと思ったのですが、図面作成が間に合わず、現時点では、東西の溝断割トレンチの標高や集水桝の高さの関係からいってそうだろうと思います。
野村オブザーバー	水琴窟ですが穴は小さいですよね。
事務局	小さいです。直径2～3ｃｍです。
野村オブザーバー	ものすごく小さいですよね。それだと、音が反響しない。穴は少し大きめにしないといけません。水が落ちる部分と、音が反響する部分が空いていないと返ってこないのです。水琴窟と表現するのは、やめたほうがよいと思います。
仲副座長	水琴窟だとすると、手水鉢の排水施設となりますが、手水鉢が据え付けられた痕跡というのはありますか。
事務局	手水鉢の抜き取り痕というのは、精査している段階でも見つかっていないです。どのくらいの大きさの手水鉢なのかということは、発掘調査の成果の中からの判断では難しいです。
仲副座長	建物との関係ですよね。文政期より後だから、兵舎のとき。薬莢がでてきているということですね。兵舎の平面配置というのは、どのくらいわかっているのでしたか。ある程度の推定図があるのでしょうか。明治村所蔵の図面があったかと思います。
丸山座長	明治村所蔵の図面と重ねてもらったらよいと思います。
事務局	そうですね。重ねていくしかないですね。
丸山座長	確認してもらうとおもしろいかもしれません。他は、よろしいでしょうか。 それでは、2つ目の議題、発掘調査の成果については、これで終わりたいと思います。発掘調査はとても重要で、その成果を庭の設計に活かさなければいけません。近代の部分をどうするのかというところは、まだいろいろ問題もありますが、江戸期の庭を基本として再生していかなければなりません。これからも、調査後は埋め戻して、現況を報告してもらうかたちでお願いします。 これで終わりたいと思いますが、確認で、議事１について現状変更申請の手続きがありますので、皆さまから認めていただいたということで進めていきたいと思います。工事ができればようやくブルーシートがなくなるかもしれませんね。なお、今後遺構保護等の養生をする際は黒やカーキーの色等疑似的な色で実施していただきたいなと思います。
事務局	議事２の調査につきましても、現状変更の手続きを進め、今年度調査を行いますので、よろしくお願いします。
事務局	丸山先生、進行をありがとうございました。本日、北園池の今後の整

	備について大きな一歩を踏み出す会、議論を進められた会になり、感謝申し上げます。また、先ほどの水琴窟ではないという貴重なお話もいただくことができました。経験の少ない若いメンバーで調査等を行っていますので、先生方のご助言をいただきながら進めることが名古屋城全体の魅力アップにつながると思っています。引き続き、ご指導のほどよろしくお願いいたします。 　以上をもちまして、34 回の庭園部会を閉会します。ありがとうございました。